



日本ブロンテ協会

2015年30周年記念大会プログラム



日時 平成27年10月17日(土) 9時50分から17時30分まで

場所 立正大学大崎校(品川キャンパス)石橋湛山ホール

〒141-0032 東京都品川区大崎4-2-16 (JR山手線・湘南新宿線大崎駅より徒歩7分)

- 総合司会 大東文化大学教授 栗栖美知子
元立正大学教授 鮎澤乗光
- ★開会の辞 9:50
- ★研究発表 10:00～12:00
- 司会 松蔭大学教授 阿部美恵
- 「アニータ・ブルックナーの小説とシャーロット・ブロンテ」
富山大学専任講師 小田夕香理
 - 「孤児のヒロインの物語が描く家族—『ジェイン・エア』と『ローズ・タークランド』から考える—」
茨城大学准教授 市川千恵子
 - 「『嵐が丘』と『ヴィレット』における生の信仰—肉体と魂の矛盾」
早稲田大学教授 木村晶子
 - 「『嵐が丘』と『アグネス・グレイ』における動物と「自然」の表象」
上智大学准教授 小川公代
東京藝術大学准教授 侘美真理
- ★総会 13:00～13:30 司会 事務局
- ★奨励賞表彰式 講評 日本ブロンテ協会奨励賞審査委員長
青山学院大学教授 橋本清一
- ★会長挨拶 立正大学教授 白井義昭
- ★会場校挨拶 立正大学文学部長 齊藤昇
- ★30周年記念大会特別展「ブロンテ文学を観る、聴く、味わう、触れる」 13:50～16:00
- 観る(於石橋湛山ホール) 13:50～16:00: ブロンテゆかりの場所の写真展示
ブロンテ関係の希少本の展示 (担当: 神戸海星女子学院大学教授 惣谷美智子)
- 聴く(於石橋湛山ホール) 13:50～15:00: 19世紀英国家庭音楽の楽しみ
(司会: 元川村学園女子大学教授 田中淑子) (演奏・歌唱: 佐野健二・平井満美子)
- 味わう(於3B教室) 15:05～16:00: ブロンテ姉妹の作品に出てくる菓子を味わう
oatcake, seedcake, biscuits, teacake, crabcheese を試食
作品に出てくる食品、料理本の展示 (担当: 埼玉大学教授 宇田和子)
- 触れる(於3B教室) 15:05～16:00: 当時の女性たちが励んでいたレース編みの展示、実演、試作に参加、販売 (担当: 苫小牧駒沢大学教授 佐藤郁子)
- ★記念講演 16:15～17:15 司会 フェリス女学院大学名誉教授 久守和子
講演 スウェーデン・ルンド大学教授 Marianne Thormählen
演題 The Brontës and History
- ★閉会の辞 17:20 帝塚山学院大学名誉教授 内田能嗣
-
- ★懇親会 18:00～20:00 会費 7,000円
於 大崎ニューシティ2F「謝朋殿」
司会 日本大学教授 田村真奈美

1. アニータ・ブルックナーの小説とシャーロット・ブロンテ

富山大学専任講師 小田夕香理

アニータ・ブルックナーは、ジェイン・オースティンと比較されることが多い作家であるが、彼女の小説には、シャーロット・ブロンテの影響も見られる。例えば、『秋のホテル』（1986）には、シャーロットの作品への直接的な言及は見られないものの、ヒロインのイーディスが結婚をめぐる一連の騒動は、『ジェイン・エア』のヒロイン、ジェインがロチェスターやスイン・ジョンとの関係のなかで経験する葛藤を思わせるものであると指摘されてきた。また、イーディスは創作上の行きづまりを感じている独身の小説家でもあり、彼女には作家のシャーロットとも立場的に共通するところがあると考えられる。本発表では、ブルックナーの小説から主に『秋のホテル』を取り上げ、シャーロットの作品や伝記的言説と比較する。二人が描くヒロインの相違点を明らかにし、異なる二つの時代における女性の人生と女性作家のあり方について考察したい。

2. 孤児のヒロインの物語が描く家族

—『ジェイン・エア』と『ローズ・タークランド』から考える—

茨城大学准教授 市川千恵子

19世紀のイギリスの小説には、孤児のヒロインが多く登場する。家族という制度から排除されていたヒロインが、結末では結婚によって新たな家族を生み出していくというプロットは、多くの作品に共通する。今日では性の二重規範批判の運動家として知られるエリス・ホプキンズの小説『ローズ・タークランド』（1876）は、出版時に『ジェイン・エア』（1847）との類似を指摘されていた。両作品のヒロインは社会的因習に汚染されていない無垢さと、不運な人生を切り開く強さを持ち合わせており、ともに結婚によって階級を上昇し、幸福な家庭を獲得する。しかし、両作品が表面的には家庭の価値観を称揚しつつも、規範的家族のイメージに虚構性と暴力性を胚胎させ、さらに、その結末において、父権的権威を空洞化させていることにも留意しなければならない。本発表では、孤児のヒロインの物語が描く家族をめぐる規範の保持と個人の欲望充足の葛藤の様相を検証したい。

3. 『嵐が丘』と『ヴィレット』における生の信仰—肉体と魂の矛盾

上智大学准教授 小川公代

『文学と悪』でバタイユはエミリー・ブロンテの『嵐が丘』を評して「エロティスムとは、死を賭すまでの生の讃歌である」と述べた。このような問題意識を継承した Susan Ostrov Weisser はキャサリンの生と死の極限を「欲望する魂」、Robert M. Polhemus は「官能的な信仰の力」と表わしている。しかし、ここに肉体と魂の思想的矛盾が表れていることについてはあまり研究がなされてこなかった。このような矛盾を解明する鍵は、19世紀に急速に伝播した「唯物思想」にあると考える。解剖学や生理学の発達により、魂の所在が脳や神経器官に移行したと考えられるようになったが、それは矛盾を孕む自己表象を生み出した。シャーロットもまた『ヴィレット』では肉感的な女優ワシテの放つエネルギーの中に、スピリチュアルな側面と生理学的な側面（「激烈な奔流」という身体内部の比喩）を見いだしている。このような両義性がエミリーとシャーロットの信仰とどのようにかかわっているか検証したい。

4. 『嵐が丘』と『アグネス・グレイ』における動物と「自然」の表象

東京藝術大学准教授 佐美真理

エミリー・ブロンテの詩では「自然」が身体的な経験として描かれることがある。風の音や木々のざわめきなどが詩人に怪しげに誘いかけ、その誘惑は特に身体的に働きかけるなど、「自然」と「死」の世界がもたらす魅力や性的恍惚の暗示などが示される。また、エミリーの動物や自然に対する観察眼は自身の死生観に影響を与えるなど、その作品の中で動物と死は密接に結びついており、『嵐が丘』の最後の場面における風と蛾の描写などがその一例に挙げられる。一方、アン・ブロンテの『アグネス・グレイ』にも様々な動物が登場し、こちらは人間の倫理観と密接な関係がある。さらに、両作品ともに動物に対する暴力的な描写が含まれ、また動物

と人間との関わりが性的な暗示を含むなど、類似する点も極めて多いと言える。本発表では、この2つの作品を中心に、動物と「自然」の表象について考察し、かつプロンテ姉妹のセクシュアリティという問題も考えてみたい。

30周年記念大会特別展「聴く」プログラム

ワルツ Valse / Fernando Sor (1778-1839)

昔々 Long, long ago / Thomas Haynes Bayly (1797-1839)

フローラ・マクドナルド Flora McDonald / Michael Kelly (1762-1826)

君を想う Nur Andenken / Ludwig van Beethoven (1770-1827)

愛するツィターよ Komm, liebe Zither, komm / Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

セレナーデ Serenade / Franz Schubert (1797-1828) arr: J.K.Mertz

アヴェ・マリア Ave Maria / Franz Schubert (1797-1828) arr: N.Cost

メヌエットハ長調 Minuetto in C / Fernand Sor (1778-1839)

植生の宿 Home sweet home / Sir Henry Rowley Bishop (1786-1855)

熟したチェリー Cherry ripe / Charles Edward Horn (1786-1849)

佐野健二氏・平井満美子氏プロフィール

佐野健二氏は、英国ギルドホール音楽院を首席で卒業。平井満美子氏は神戸女学院大学音楽部声楽科卒業。両氏は、数少ないリユートとソプラノのデュオで、ルネサンス、バロックのリユート歌曲のスペシャリストとして活動。特に英国音楽への深い理解が注目される。発売されたCD 6点は雑誌「レコード芸術」や「音楽現代」の推薦盤に選ばれ、デュオリサイタルに対しては「大阪文化祭本賞」を2回受賞するなど各方面から注目されている。また両者の演奏はテレビコマーシャル等にも使われ、広く人々に親しまれている。アーリーミュージックカンパニー EMC (<http://www.emclute.com/>) 主宰。

Marianne Thormählen 氏プロフィール

ルンド大学(スウェーデン)の英文学の教授。T.S.エリオットやジョン・ウィルモット(ロチェスター伯)に関する論文の著者。プロンテに関しては著書として *The Brontës and Religion* (Cambridge University Press, 1999) と *The Brontës and Education* (Cambridge University press, 2007)、編著書として *The Brontës in Context* (Cambridge University Press, 2012) がある。編著書の邦訳は、日本プロンテ協会の会員による共訳により、『時代背景の中のプロンテ』というタイトルで大阪教育図書から今秋出版される予定。